

三兵答古知幾

九



396
● 11
1

097
201
6591



已五十八

昭和七年八月廿一日
小川為忠氏寄贈

三兵答古知幾卷之九目次

第四戰鬥之一 戰鬥學

野戰郊戰論 改

同上利害 增

步兵戰法之部

步兵戰隊定則 改

步兵攻守二法利害 改

步兵銃攻守二法比較算法 增

強步兵銃火力陣法 增

步兵戰隊第二陣設遊軍法 增

目次

步兵戰鬥陣布列法

增

散戰得大利一例

增

步兵戰陣放銃法

增

步兵拔臺龍攻守二用陣圖

增

同上陣法挑戰定法

增

放銃法擇時期一例

增

拔臺龍指揮官緊要職務

增

第二陣編束法定則

改

步兵第二陣主職

增

步兵遊軍陣法

改

同上用法

尋常步兵戰細比支陣圖

同上之解

三兵答古知幾卷之九

第四戰鬪法之一 即戰鬪

野戰郊戰論

兩軍 敵ト吾トナリ 互ニ相近ク所以ノ者ハ、行軍ノ運動ニ、
 而其本主意トスル所ハ、遂ニ兵力ヲ用ユルニ在リ、是
 レ野戰郊戰ノ生スル所ナリ、而敵ノ諸器衆物ヲ粉壑
 シ、其戦力ヲ失ナハシムル者ハ、此ニ戦ニ係ル、故ニ軍
 事ハ、必ス大會議ヲ以テ、之ヲ決定ス、但シ、全軍ノ諸隊
 未タ損敗セサル者ハ、常ニ必ス、再ヒ其戦地ニ進出ス、
 故ニ其勝敗ノ候ハ、兵士全ク死亡消去スルノ後ニ非

同上利害

サレハ唯尚疑惑スヘキ状ヲナスナリ、往々既ニ勝利
ヲ得テ、尚速ニ其期ヲ失フコト多シ、是レ此ニ因ルナリ、
凡ソ勝敗ヲ決スルニ、大郊戰ヲ主トシ、又ハ連綿タル
大小ノ野戰ヲ要スルノ何如ハ、殊ニ三ノ者ニ關係ス、
其一ハ、兩軍主將ノ才能ニ係ル、其二ハ、諸兵操熟ノ度
分、及ヒ其情意ニ係ル、其三ハ土地ノ形狀戰鬪ノ事情
形勢ニ係ル、是ナリ、○三十年間爭亂ノ戰ヨリ、儼堙勿
以イキ幾キ、王稱稱、察第十四世ニ至ル迄ハ、戰法ニ原ツキ、瑪
爾期ル加爾古官般薩ハシ幾旋キ、入諸般ノ大野戰ヲ廢棄シ、公
然トシ、自ラボストガヘラシ鎮戰ノ利ヲ主張ス、丟連チユレン、子名モ亦其以前

二ハ、一ニ此法ニ尤祖ス、然レ後世ニ至テ、始テ此法ノ
非ヲ看破シ、漸ク之ヲ尊崇セサルニ至ル、而強盛ノ大
國屢々一鎮戰ノ後ハ、忽チ潰破メ、滅亡スルヲ見ル、是
レ他ナシ、鎮所ノ戰鬪ニハ、其諸物品ヲ失フ者、遂ニ容
易ニ復シ難キ故ナリ、按郊戰ハ城外ノ郊野、一定ノ戰
堡、如如キ、大小ノ鎮所ニテ戰ナリ、其實郊戰ト同シ、元
來鎮所戰トスベシ、今略シテ、鎮戰トナスナリ、
諸兵互ニ相離レテ、戰ヲ挑ミ、又ハ一齊ニカヲ併セテ、
戰ヲ爲ス、何如ハ、戰鬪ノ事情、又其種類ニ係ル、步兵
單用ノ戰鬪余意但シ衆多ノ大隊ハ、全ク一種ノ事情
形勢ヲ得ルノ外ハ、之ヲ行フコトナシ、騎兵戰ト、礮兵戰

三六六

步兵戰隊
定則

礮火連發ハ、此ニ反メ、他ノ諸兵ニ關涉セズ、幾多ノ形勢ニ應メ、軍中大率日ニ之ヲ用ユ、
步兵戰法之部
單純ノ步兵戰ハ、總テ兵士ヲ損害スルヲ多クシ、此ニ由テ勝利ヲ得ルノ益ナシ、通メ步兵戰正ニ止ムノ時、勝敗ノ期會始テ生ズ、其理何如ント云ニ、步兵ノ力ハ、烈シク敵ヲ追撃シ、以テ其勝利ニ益スルノ外ハ、之ヲ伸フルヲ能ハサレハナリ、

原註ニ曰、今此説ヲ增補メ、以テ其義ヲ詳ニスルハ、蓋シ裨益ナキニ非ズ、故ニ茲ニ之ヲ附ス、○夫

良步兵ハ、諸形勢ニ當テ、常ニ能ク敵陣ヲ衝破スルノ功カアリ、然レ其破開スル處ヲシテ、再ヒ敵閉セサラシメントスルニハ、直チニ其處ニ急兵ヲ衝入スルヲ要ス、若シ夫レ其間少ク遲怠スルハ、敵其陣列ヲ調整メ、再ヒ此破開ノ處ヲ敵閉スル故ナリ、然レ單ニ步兵ヲ用テ、此功ヲ取ルニト欲シ、急ニ之ヲ進送スレハ、忽チ繚亂ノ變ヲ生シ、且ツ敵ノ直發礮ニ觸ル、ト多ク、而此ニ因テ、進攻シ難キノ患ヲ生ズ、是故ニ、騎兵礮兵ヲ用テ、其破開ノ處ヲ廣濶スルヲ要ス、敵其近傍ニ

遊軍ノ奇兵ヲ備テ之ヲ保護スル事ト雖モ此二
兵ハ容易ニ其圍攻ヲ受ルノ危難ヲ免ルヘシ
步兵火步兵銃ハ尤ノ三ノ者ニ因テ其功力ヲ強盛ニ
ス其一ハ諸兵ノ陣列宜キニ係ル其二ハ銃ノ用法其
度ヲ得ルニ係ル其三ハ良地ヲ占領スルニ係ル是ナ
リ
原註ニ曰諸種ノ戦闘ハ通ノ唯此良地ヲ占得ス
ルニ係ルナリ
輓近ノ戦闘法ノ形勢ニテハ廣濶ノ戰場ニハ大歩兵
戦ヲ行フ可カラス但シ各所偏ク兵ノ設ケ切實照定

ノ射撃法ヲ行ヒ戦闘ヲ持久シ大運動ヲ發メ以テ勝
敗ヲ決スルノ期ヲ俟ツニハ多クハ歩兵戦ヲ以テ適
合トスト雖モ此モ亦唯諸鎮戦ニ行フベシ但シ大運
動ハ礮兵ヲ以テ其路ヲ闘キ歩兵ヲ以テ之ヲ促シ騎
兵ヲ以テ之ヲ終ルナリ
歩兵散隊ノ猛烈慘酷ノ戦闘ハ今世歩兵戦ノ巨魁ナ
リ但シ後世ニ至テ散隊ノ定法ヲ立テ之ヲ完備セン
ト欲スト雖モ大散隊ヲ用ルノ間ニ於テ未タ冀望ス
ヘキ全備ノ法ヲ見ス其根本ノ定則ニ至テモ尚未ク
一定セズ或ハ稠密ニ雙列スルヲ良トシ或ハ唯僅ニ

十二步ヨリ、十六步ヲ以テ、其慘列ノ距度トシ、或ハ又
 各國往々尚瑪爾斯加爾古官般薩幾旋名ノ説ニ從テ、
 各種ノ小散隊ヲ設ルノ法ヲ固守ス、但シ、其費ス所ノ
 藥包子ノ數ト、射殫スル兵士ノ數ヲ比較スルキハ、此
 ニ由テ、其利害得失ヲ證明スルニ足レリ、當時答刺ラ獲
 那名地ニ於テハ、拂朗察ノ運送守護兵、大抵五千人ニノ、
 一日ノ間ニ、藥包子ヲ費ヤスノ數、一百萬ニ至ル、又拂
 朗察軍、急ニ亞爾義爾名地ヲ襲フノ時ハ、散隊ノミニニ
 十四日ノ間ニ、藥包子三百萬ヲ放射ス、
 原註ニ曰、亞斯刺烏名地ニテハ、銃ヲ發ツテ、七萬ニ

ハ、喝斯甸列以幾人、僅ニ三千人ヲ殫ス、
 又獨逸人、始テ拂朗察ト、戰フノ時ハ、實ニ二國兵士ノ
 練熟スル所ト、其戰法ノ利純ヲ、比較スルニ足レリ、然
 氏之ヲ按スルニ、其優劣何如ハ、容易ニ之ヲ定メ難シ
 トス、
 其時ノ形勢、大歩兵戰ヲ要スルキハ、地利ヲ占領ス、以
 テ其不便ヲ補ヒ、而殊ニ尤ノ如クニ、之ヲ備フヘシ、
 其一ハ、吾銃火ハ、勉テ其勢力ヲ強フシ、
 其二ハ、敵ノ銃火ハ、勉テ我兵ヲ害スルヲ、少ナカラ
 シメ、

其三ハ、戦テ利ヲ得ル時ハ、急ニ進出スルニ、妨ケ無
ラシメ、
其四ハ、戦闘利無キキハ、敵ノ進撃スル猛カヲ防避
メ、以テ中軍ヲ保護スルノ干楯トナルヘシ、是ナリ、
總テ上ノ諸目ニ、應當スル法ヲ行ハント要セハ、先ツ
第一ニ強盛ノ散隊火ヲ發シ、連綿トノ之ヲ保續セシ
メ、以テ其干楯ヲ制スルノ間ニ、其戦闘ノ形勢ニ準メ、
要スル所ノ諸方法ヲ行フニ、便ナラシムベシ、但シ、此
時ニハ、良地形ヲ占領スルニ非サレハ、其功ヲ得ルコ
ト少ナシ、故ニ歩兵散隊ハ、殊ニ意ヲ用ユ可キ者ナリト

雖モ、各國普ク茲ニ注意セス、通メ其戦闘ヲ促カスニ
緊要ノ三思ヲ加フルコトナリ、散兵戦隊ヲ制始ヨリ或
ハ甚タ弱ク、兵數寡少ナルナリ或ハ甚タ強ケレハ、兵數衆多ナルナリ常
ニ其誤失ヲ生ス、但シ、其實ハ形勢ニ從テ、逐次ニ其數
ヲ減シ、而危急ノ時ニハ、別ニ遊兵ヲ進メテ、之ヲ助ケ
ントスルノ主意ナリ、然ニ此ニ因テ、往々好期會ヲ失
フコト多シ、何如ントナレハ、其命令ヲ下スノ時ハ、既ニ
其期ヲ失シ、或ハ否ラサル時モ亦兵士其定處ニ到ル
ノ時ハ、既已ニ其期ニ後ルヘカ故ナリ、此ハ通メ、其主
將獨斷メ、諸務ヲ行ハント欲シ、而散隊ヲ用ル間ニ

至テ、自ラ狐疑猶豫スルヲアルノ時ニ多シ、然レ散兵
戰隊ハ、直チニ其兵數ヲ増加シ、以テ孤行ノ、自ラ攻拒
兩般ノ諸戰ヲ行フニ便ナラシメ、而此法行ヒ難キ
ハ、其事情ニ從テ、便宜ノ諸法ヲ行ハシム、是レ多クハ
的當ノ法ニシテ、又此ニ由テ、二道ノ利益アリ、其一ハ、敵
ノ急襲ヲ受サルナリ、其二ハ、其時ヲ測リテ、其兵ノ一
部ヲ進出スルヲ得ルナリ、此法敵ノ形勢ヲ透見セ
ントスルニハ、殊ニ一大利益アリトス、
其攻撃不意ニ出テ、其勢猛烈ナレハ、敵急ニ此ヲ防キ、
其力ヲ發スル所モ、亦強カラサルヲ得ス、故ニ如此

此ハ、敵ヲ苦ムルノ功、更ニ大ナリトス、是故ニ始ヨリ
此處ニ注意シ、殊ニ敵ノ思議スヘカラサルノ處ニ、此
兵ヲ備テ、固守セシムルヲ良トス、○但シ此時ノ大主
要ハ、其戰鬥勉テ、暴虐猛烈ナルヘシ、是故ニ、散隊數次
ノ戰鬥ヲ經テ、練熟スル者ヲ選ミ、幾多ノ耶僕兒名兵及
ヒ狙擊銃手ヲ副加スヘシ、余意其數ハ勉テ多カルヘシ、唯之ヲ得テ、此ヲ編入布
ナキヲ度トス、甚タ利アリトナス、而預メ此二兵ニ命
スルニ、殊ニ指揮ノ職事官、及ヒ其他ノ上職ヲ狙擊ス
ルヲ以テスヘシ、練熟ノ狙擊銃手ハ、二百步ニテ逸失
ナク、三百步ヲ距ルト雖モ、洞射セサルヲ少ナシ、故ニ

此ニ因テ之ヲ見レハ、此ノ如キ散隊ノ火力ヲ以テ發
スルノ危害豫シメ想フヘシ、更ニ狐疑三思ヲ加フル
所ナシ、○獨逸國人ハ、其性質此戰法ニ應當ス、故ニ少
シク操練スルキハ、忽チ其極度ニ達スベシ、又精熟ノ
耶傑兒ハ、各所有ラサルコトナク、而貌古斯銃ノ外、尚他
器ヲ使用シ、進退等ノ諸法ニ熟スヘシ、故ニ此ハ爭亂
ノ日ニ臨テ、別ニ軍中ニ、耶傑兒及ヒ狙擊銃手ノ數ヲ
増シ、以テ早く、敵ニ一二着ノ利ヲ失ハシムルヲ良法
トス、而凡ソ如此ナルキハ、吾兵敗ル、ト雖モ、敵兵尚
恐怖スルノ利アリ、

散隊ヲ援救スルノ法、及ヒ其援兵ニ、大小ノ諸分隊ヲ
擇ムノ要ハ、通ノ土地ノ形狀、戰鬥ノ主意、戰鬥ノ時期
始ヨリ終リ迄、等ニ準メ、之ヲ定ムヘシ、而此外ニモ亦
ノ間ヲ云フ、敵ノ攻撃スル方法ニ、準スルヲ要スル者、甚タ多シ、故
ニ預メ、其一定ノ法ヲ立ルハ、甚タ允當セス、且ツ無益
ニ屬ス、然レ諸形勢ニ拘ハラス、常ニ緊要トスル所ハ、
戰鬥ノ間、散隊ノ形勢ヲ異ニスル毎ニ、援兵預メ、其準
備ヲナシ、唯其定法ニ準當スル諸方法ヲ、定ムルニ在
リ、是故ニ散隊ノ救法ハ、十分ニ之ヲ行フコト、能ハサル
ヲ以テ、殊ニ預メ、此ニ命メ、勉テ進撃ヲ制止シ、十分ニ

敵ヲ透見シ、敵ノ欲スル所ヲ明察スル迄ハ之ヲ抑止
シ、殊ニ其好期會ヲ俟テ、始テ進撃シ、其本主意ヲ達ス
ヘシ、故ニ上ニ示ス、散隊ノ猛火ハ、敵ノ透見ヲ妨ケ、且
ツ吾方法ヲ行フ所ヲ蔽掩シ、敵ヲノ之ヲ知ルヲ能ハ
サラシムルノ利アリ、且ツ此ニ因テ、此兵モ亦其好期
ヲ俟テ、進撃スルノ利ヲ得ルナリ、
散隊ノ戰鬪ヲ始ルノ距度、敵ヲ距ルハ、學科ノ定法ヲ
立ル所、必スシモ一致セス、通メ唯近距度ニ至テ、點發
スルヲ良トス、然レ諸家ニ從フニ、余意但シ此ハ尚幾
多ノ議論ヲ免レサ
ル法トシ、散隊ハ、敵ノ眼目ノ白膜ヲ明視スル時、始テ點

發スルヲ良ト云フ、但シ、今銃九ノ功力ヲ考ルニ、四百
歩ニテハ、其敵ヲ洞射スルノ數、八分ノ一トシ、三百歩
ニテハ、四分ノ一トシ、二百歩ニテハ、三分ノ一トス、故ニ
此ヲ以テ、之ヲ考ルキハ、三百歩、及ヒ其余ノ處ニテ、點
發スルハ、甚タ允當ノ法ナルベシ、

原註ニ曰、風舎垓爾ノ小銃用法ヲ示ス、書中ニ
出ツ、

而更ニ、遠距度ニテ、點發セントスルハ、唯練達ノ銃手
ニノミ、行ハシムヘシ、指揮ノ諸官、既ニ其兵ヲ熟知ノ
此ヨリ常ニ俟ツヘキノ利ヲ明ニスルハ、能ク之ヲ

導キテ良處ニ到リ、容易ニ其戰ヲ始ムルヲ得ルナ
 リ、○遠距度ニ在テ、射擊ノ其丸ニ虚發ナク、散隊點發
 ノ法ニ熟シ、指揮ノ羈絆ナク、能ク其照法ニ應當ス
 ル片ハ、別ニ大ナル害ナシト雖モ、一人ヲ洞射スルニ
 ハ、各所無益ニ費ヤス所ノ藥包子、其量却テ人ノ重サ
 ニ過ルヲ多ク、而兵卒遠距度ニ在テ、敵ヲ殪ス片ハ、爾
 來之ヲ顧思メ、近距度ヲ恐レ、耶傑兒偶然ノ僥倖ニ因
 テ、其功ヲ得ル片ハ、爾後往々敵ノ爲ニ急襲ヲ受ケ、動
 亂スルノ災ニ罹ルベシ、察セズンハ、アル可カラズ、唯
 軍中ニハ、須ク嚴ニ虚發メ、誤用スルヲ制止スベシ、

步兵攻守
二法利害

步兵孤行隊、廣濶ノ戰場ニ在テ、兩ナカラ、我ト敵
 數ヲ齊フシ、其形勢ヲ同シクメ、互ニ相逼進スルハ、實
 ニ甚ク稀ナリトス、然レ今假ニ、之ヲ設ケテ、以テ兩步
 兵放銃スルノ利害ヲ比較スルニ、上ノ射度凡射中ノ
 ヲ用ユレバ、静止ノ攻撃ヲ俟ツ者ハ、其利ヲ得ルヲ頗
 ル大ナリトス、○略列風里林斯リッス的リッス倫リッス名ノ書中、之ヲ示
 ス、一、尤ノ如シ、

步兵銃攻
守二法比
較算法

百五十步ニテハ	二發メ一丸	其的ニ中ル
二百步ニテハ	五發メ一丸	其的ニ中ル
三百步ニテハ	七發メ一丸	其的ニ中ル

四百步ニテハ 十五發ノ一丸 其的ニ中ル
 但シ其功力稍弱クメ上ノ如ク強カラストスレハ
 五十步ニテハ 二發ノ一丸 其的ニ中ル
 一百步ニテハ 三發ノ一丸 其的ニ中ル
 百五十步ニテハ 四發ノ一丸 其的ニ中ル
 二百步ニテハ 七發ノ一丸 其的ニ中ル
 二百五十步ニテハ 十發ノ一丸 其的ニ中ル
 三百步ニテハ 十五發ノ一丸 其的ニ中ル
 今甲乙ノ拔臺龍其兵數各六百六十人トシ其中銃數
 六百枝トナシ互ニ相進ニテ相射撃セントスルニ三

百歩ノ處ニ至テ各其先導ノ散隊ヲ斂メ拔臺龍隊ヨ
 リ點發スレハ其利害算法ニ示ス所左ノ如シ
 甲ノ拔臺龍自ラ進ニテ三百歩ノ距度ニ至リ一齊ニ
 點發ス此ニ因テ乙ノ拔臺龍其兵ヲ失フノ數ハ即チ
 十五分一ノ射中數ヲ準トシ六百發ニノ四十人トナ
 ス而其拔臺龍中小指揮官樂器手總合メ六十人トシ
 六百六十人ヨリ之ヲ除ケハ其點發スル者唯六百
 人トス故ニ四十ヨリ四ヲ去リ其銃卒ノ死スル者三十
 六人トス而銃卒六百ヨリ三十六人ヲ去レハ乙ノ
 拔臺龍ノ銃數五百六十四枝トス而乙ノ拔臺龍モ又

其距度ニ在テ、甲ニ對ノ點發ス、然ルキハ、甲隊此ニ因
テ、其士ヲ失フノ數ハ、即チ上ノ第十五發ノ射中數ニ
メ、五百六十四發ナレハ、其甲ノ兵士ヲ倒ス者、三十七
人ニ當ル、今上法ニ因テ、三十七ヨリ三ヲ去ルキハ、其
銃ヲ失ナハシムル數、三十四枝トス、故ニ今六百ヨリ
三十四ヲ去レバ、其殘ル所ノ數、五百六十六トス、甲隊
更ニ裝藥ノ、大約二百八十歩ノ處ニ進ム間ニ、乙隊更
ニ、第二ノ齊發法ヲ行ス、此距度ハ、第十三發射中數ト
ス、故ニ此ニ由テ、甲隊兵士ヲ失フノ數、三十九人トス、
今五百六十六ヨリ、三十九ヲ去レハ、其銃ノ殘ル數、五

百二十七枝トナル、但シ、甲隊此ニ因テ、畏縮セス、二百
六十歩ノ處迄、進ムキハ、其隊未タ點發セサルノ前ニ、
又乙隊第三、齊發法ヲ行、是ニ於テ、甲隊又五百二十七
枝ノ中ニ、四十六枝ヲ失ヒ、其殘銃四百八十一枝トナ
ル、而シテ此處ニテ、甲隊齊シク銃ヲ點發ス、此ニ由テ、乙
隊五百六十四枝ノ間ニ、四十ヲ失ヒ、殘銃五百二十四
枝トナル、而シテ甲隊又裝藥ノ、再ヒ進行スルノ間ニ、乙
隊二百五十歩ノ處ニテ、更ニ第四ノ齊發法ヲ行フ、故
ニ甲隊此ニ因テ、四百八十一ノ數ヲ減メ、四百三十四
トナル、然レ甲隊尚行ヲ促シ、而シテ大略二百二十五歩、

又ハ二百三十歩マデニ逼ル間ニ、又乙隊ノ第五ノ齊發法ヲ受ク、此距度ハ、九分一ノ射中數ニ當ル、故ニ其兵減メ、僅ニ三百八十一トナル、但シ、尚其行ヲ進メ、二百二十歩ノ處ニテ、甲隊第三ノ齊發法ヲ行フ、此距度ハ、其射中ノ數、八分一ニ當ル、故ニ乙隊此ニ由テ、減ノ四百八十トナル、但シ、乙隊此處ニ在テ、第六ノ齊發法ヲ行フ、此ニ由テ、甲隊ノ銃數減メ、既ニ三百二十七枝トナル、而シテ、甲隊二百歩ニマテ逼進スルノ間ニ、乙隊更ニ第七ノ齊發法ヲ行フ、甲隊此ニ由テ、新ニ銃ヲ失フノ數、又六十四枝トス、而シテ、甲隊尚勉強シ、百八十歩

ノ處ニ到リ、其第四ノ齊發法ヲ行ハントスルニ、此間ニ於テ、乙隊ノ第八齊發法ヲ受ク、此距度ハ、其射中ノ數、六分一トス、故ニ甲隊又此ニ由テ、減ノ百九十三トナル、是ニ於テ、其第四ノ齊發法ヲ行フキハ、乙隊此ニ因テ、其失フ所、僅ニ二十九人トス、故ニ其隊中銃數、尚四百五十枝ヲ具備ス、是ヲ以テ、如此ニメ、甲隊次第ニ逼進スルキハ、此法ニ因レハ、遂ニハ一人ヲ餘ス、能ハサルニ至ルヘシ、此等ノ算法、究理ニ依據シテ、攻撃ノ時ニハ、其放銃法ヲ節ニシ、而今時ノ定法ニハ、敵陣ニ衝入スル前ニ、齊發法ヲ行フノ數、僅ニ三次トス、○

今上ニ示ス所ノ者、少シク偏固ノ癖説ノ如シト雖モ、
 此處ニ依據セハ、後來形勢ノ要スルニ從テ、兩軍敵ト
 フ互ニ歩兵戰ヲ行フノ時ハ、之ヲ攻ムルニ、銃ヲ以テ
 スルハ、其兵ニ利ナキノ理、明々亮々之ヲ算定スルヲ
 得テ、他ノ定法形勢等ニ因テ、妨ケラレ惑ヲ取ルノ患
 ナカルヘシ、○又攻撃ヲ受ル者、防守ハ其射中ノ數ヲ
 得ルヲ多ク、且ツ靜止ノ齊發法ヲ行ヒ、而其終末ノ期
 ニ至テハ、直チニ逆攻メ、敵ヲ擊ツヲ得ルノ利アリ、
 原註ニ曰、古昔亞那垵爾魯地名鎮所、戰鬪ノ前時、軍
 議ノ日、古名將知里夫爾失喝人名自ラ主張メ、守兵

強歩兵銃
火力陣法

ノ利ハ常ニ攻兵ヨリ大ナルヲ辨ス、今此ニ由テ、
 益其説ノ真ヲ知ルヘシ、
 但シ、歩兵戰ニ一定ノ法則一修ニ定ムル尺度ナリ、
 守リ、以テ功ヲ得ントスルニハ、勉テ此ニ應當スル陣
 形ヲ制スルヲ要トス、○先ノ第一則ハ、吾銃火ハ、勉テ
 其勢カヲ強フスト云フ語ニ、應當スルニハ、戰鬪ヲ掌
 ルノ拔臺龍、敵ノ攻撃ヲ受ルキハ、早ク既ニ之ヲ橫隊
 トナシ、否ラサレハ、直チニ進ンテ、之ヲ攻ムヘシ、但シ、
 兵鬪、此時ノ諸法ヲ論スルヲ、頗ル浩漭ナリト雖モ、雜
 駁ノ諸法、瑣々タル細事ハ、此處ニ的當セス何如トナ

レハ其時ニ臨テ方法ヲ行フハ甚タ易ク此處ニ至テ窮スルヲ無レハナリ唯其地形ニ準メ之ヲ直線又ハ撓線ニ布列シ其功共ニ一ナリ而其前面ニハ勉テ長斜坂狀ノ懸崖ヲ占領シテ以テ其銃ヲ直發シ其力ヲ強フシ而其力及フ所ハ其前面ニ一種ノ胸牆ヲ設クヘシ少シク他ノ益ヲ失フ所之ヲ制スル所ハ利アリトナス

○十字火ハ常ニ大利益ヲナスヘシ然レ往々之ヲ行フヲ難キノ外敵ノ主將練熟スル者ハ常ニ之ヲ避ケテ其處ニ到ルヲナシ又昔時ハ步兵ノ布列法ニハ極メテ其距度ヲ稠密ニス之ヲ慎守ノ道トナス然レ世

人銃ヲノ能ク其正功カヲ顯ハサシムル用法ヲ考究スルヲ得ルノ以來ハ漸ク此法ノ非ヲ看破シ而各國往々尚賞スルカ如キ肩臂互ニ相摩スルノ布列法ハ舉テ華法ノ一種トナス

○又上ニ示ス第三第四則即チ上ノ戰テ利ヲ得ル所ニ急ニ進出スルニ便ニシテ利ナキ所ハ攻兵ヲ防キ以ニ應當セシムルハ唯其テ中軍ノキ楯トナルヲ云ス形勢ノ宜シキ時ノミ之ヲ能スヘシ今其定法ヲ立シトスルニハ多クハ其地形ニ關係シ而大兵制ニハ之ヲ要スルヲ稀ニシ小孤行隊ニハ全ク無用ニ屬シ又之ニ加ルニ第三則上ニ出ノ時ニハ其法ハ衆隊ノ併

三兵考古口鏡 卷九

步兵戰隊
第二陣設
遊軍法

合連屬スル所ニ關係シ、主將ノ職ニ、指揮使ノ任ニ
非ス、又第十則ノ時ニ、其法ヲ定ムルハ、往々理義ニ
戾ル處多ク、徒ニ幾多ノ議論ヲ沸騰スルニイタル、而
正指揮使ノ精察、副指揮使ノ練熟ニ因テ、其時ニ應シ
テ、容易ニ良方法ヲ考出シ、此ヲ用テ、諸變ニ應シ、足ラ
サル所ナク、窮スルコト無ラシムヘシ、是レ此ヲ略スル
所以ナリ、
戰場ノ地形、廣廓ニメ障碍ナク、而敵ノ兵數、大ニ吾ヨ
リ衆多ナラサルノ時、單純ノ步兵戰ヲ行フニハ、別ニ
翼軍ノ支柱所ヲ制スルノ勞ヲ要セス、而敵ノ兵數、吾

ト相齊シキハ、唯陣列ヲ調整ノ、戰鬥ノ諸法ヲ行フ
ノ外ニ出テス、○通ノ步兵戰ノ時ハ、第二陣ハ、常ニ縱
隊トナシ、須ク此ヲ敵火ノ達セサル地位ニ備フヘシ、
故ニ第二陣ハ、常ニ良善ノ行軍陣制ニメ、直チニ蟹行
進軍法、及ビ第一陣ノ救援等ニ用ヒ、而終ニハ、別ニ不
意ニ出テ、敵ト挑戰スヘシ、此ハ常ニ較著ノ利ヲ得
ル者トス、○但シ、此戰隊ヲ制スルニ、攻撃縱隊ヲ用ヒ、
又ハ工巴屈尼縱隊ヲ用ユルノ何如ハ、其時ノ事情形
勢ニ準スベシ、○敵兵他所ニ遷動セズ、唯前面ヲ攻メ、
一方ノ戰鬥ニ、限ルヘキヲ察知セハ、攻撃縱隊ヲ用ユ

ルハ必然他ノ陣制ニ勝ルベシ是レ此隊ハ進退動遷
 ニ便ニノ且ツ兵卒モ亦此ニ練熟スルカ故ナリ○單
 純ノ步兵戰ノ時預シメ遊軍ノ陣制ヲ定メントスル
 ハ學科者流ノ虛法ニ屬ス諸家ノ考定スル所定法ノ
 示ス所遂ニ未タ實用ニ應當スル者ヲ見ス戰鬪ノ導
 法敵ノ方法等ニ由テ預定スル所ノ者悉ク畫餅トナ
 リ而第一陣ノ攻撃ヲ行ヒ諸兵ヲ分解シ其他不虞ノ
 攻襲ヲ防禦スル等ニハ唯第一陣ノミヲ專用スルト
 甚タ多シ但シ此ノ如シト雖モ此等ノ形勢ニテハ一
 二隊ノ拔臺龍ヲ工巴屈尼縱隊トナシ以テ速ニ諸方

法兵戰關
陣布列法

ニ向テ小分隊ヲ進送スルニ便ナラシムルヲ良トス
 此ハ單純ノ步兵戰ニハ各處實ニ大功ナシト雖モ全
 軍始終ノ諸戰ノ間ニハ良功ナキニ非サルナリ
 諸家步兵戰ノ陣制ヲ立ル總法ハ敵ト吾ト其兵數戰
 法等悉ク相齊シキハ其前面四百歩ノ處ニ散隊ヲ
 設ルヲ良トス但シ此散隊ハ兵數甚タ寡少ヲ要セス
 是レ火隊ト共ニ放銃スルト要セサル故ナリ若シ
 夫レ其兵數寡少ナレハ戰ノ始メト雖モ火隊ヨリ烈
 シク放銃シ以テ巨大ノ損害ヲ受サラシムヘシ○又
 此散隊中ニハ須ク適度ノ狙擊銃手及ヒ耶傑兒ヲ副

兵答古知

卷九

加スヘシ、○蘇烏知爾隊諸隊ノ前面ニ布列スル者ナリ、其兵數少ナクモ、散隊ノ半ニ居ルヘシ、其職務ハ、
 勉テ堅實ニ布列シテ、常ニ準備ヲナシ、時ニ臨テ、少シ
 モ遲滞ナク、直チニ兵ヲ進メ、敵ノ眼目ヲ掩フノ火隊
 ヲ保護スルナリ、○其後面三百歩ノ處ニ（余意）或ハ少シ
 又或ハ遠離スシク地形ニ準メ、第一陣ヲ設ク、其陣形ヲ縱
 隊トナシ、橫隊トナスハ、其地勢ニ從フヘシ、但シ、其布
 列法ハ、何等ノ形ヲ論セズ、常ニ勉テ堅實ニ備フヘシ、
 ○第一陣ノ後面四百歩ノ處ニ、第二陣ヲ設クヘシ、其
 陣形ハ、上章ニ示スカ如ク、常ニ縱隊トス、但シ、其第一

陣ヲ距ル尺度ノ多少ハ、肝要ノ事ニ非ス、故ニ先ツ其
 地形ヲ本トシテ、之ヲ設クヘシ、○往々第二陣ヲ以テ
 側面保護ノ職トスルコトアリ、然ルモ、其一部ヲ側面
 ノ處ニ置クヘシ、此ヲ的當緊要ノ布列法トス、○然レ
 此ヲ以テ、勝敗ヲ決スルノ職トシ、又ハ佯敗メ、敵ヲ導
 クノ兵ニ用ユルモ、他ノ法ヲ以テ、陣法ヲ制スヘシ、
 散隊ヲ以テ、戰鬥ヲ促シ、又ハ相對向スル拔臺龍ヲ進
 メテ、烈シク攻撃メ、以テ勝敗ヲ決スルヲ要スルコトア
 リ、但シ、其是非何如ヲ定ムルニハ、諸般ノ事情中、先ツ
 戰鬥ノ本主意ニ原ツキ、諸兵ノ勇力ニ原ツキ、又其操

三、本、古、口、義

卷九

九

散戰得大
利一例

熟ノ多少ニ原ツキ、殊ニ其地形ニ原ツキ、之ヲ考究メ
而之ニ從テ決定スヘシ、
散隊其銃ヲ連發メ、能ク持久スルハ、其利甚タ大ナ
リ、敵近傍ニ在ルハ、殺戮ノ功、尤モ甚タシトス、魯西
亞、波魯泥亞ノ二國、晩年ノ戰ヲ以テ、其證トスヘシ、始
メ總兵加刺巴列埏、人名波魯泥亞國ノ將、別列舍那川ノ又ハ、地名ヲ踰
ルノ後、命ヲ受テ、其細比支隊ヲ以テ、貌里魯窠、地名ノ林
中ニ屯ス、魯西亞兵ヲ驅逐セントス、然ルニ、其間ニ事
故アリテ、一餉時間、戰鬪スルノ後、小谿ノ處ニ至ル、此
處ニ於テ、魯西亞兵ハ、一方ニ屯シ、波魯泥亞兵ハ、上ノ細比

支隊
ナリ、他ノ一方ニ陣シ、兩軍互ニ戰ヲ接ス、此時ノ戰鬪、
甚タ猛烈ニメ、僅ニ半時ノ間ニ、細比支隊ノ總兵、及ヒ
貌里瓦埏隊ノ諸指揮使ヨリ、諸竿隊ノ指揮使、其他小
指揮使、及ヒ兵卒、共ニ六分ノ五ハ殪レテ、戰フヲ能ハ
サルニ至レリ、按上ニ示ス、耶傑兒兵、數隊ニ在リテ、而
良地ヲ占領ス、人狙撃スルニ係ルナリ、而
細比支隊ハ、全大軍中ノ一大部ニメ、且ツ守護軍ニ屬
シ、兵中ノ精英ナルヲ以テ、幸ニ其兵ヲ斂ムルヲ得
タリト雖モ、其隊此ニ因テ、甚タシク、支離分解メ、其旗
哨官ヲ聚合スルニハ、頗ル身力ヲ勞セシムルニ至レ
ル、但シ、此時ニ、其戰場ノ如ク、小谿ニ因テ、地脉全ク中

斷スルノ妨害ナキ時ハ、實ハ其戰鬥上ノ如ク猛烈ナ
ルヲ無ルベシ、故ニ散隊ノ戰法ハ、全ク地利ヲ要スル
ト多シトス、是ヲ以テ、惡地ニハ、齊整タル軍行法ヲ行
フヲ禁スヘシ、攻撃ノ時ニハ、殊ニ然リトス、越魯格
鳥地名ノ有名ノ越爾旋樹林按波魯尼亞兵魯西亞ノ兵ヲ敗ル處ナリ、尚下ニ詳ナ
リ此確證トスヘシ、又此猛烈ノ戰鬥ヲ以テ、能ク散戰
ヲ用ルノ功トスルニ足レリ、此時波魯尼亞ノ軍、戰鬥
ノ間ニ、無量ノ大利ヲ得ルハ、全ク其地理ヲ詳ニシ、諸
處ノ丘谷狹路、悉ク熟知スルニ因ル、故ニ卒然ニ發ス
ル諸變化ノ外ニモ、亦地形ノ利ニ因テ、散隊ノ正戰ハ、

步兵戰陣
放銃法

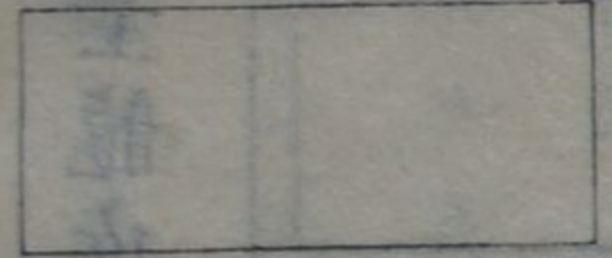
勝敗ヲ分ツ猛戰ノ用ニ充ツヘシ、小散隊ノ散戰ト雖
モ、千八百十三年我文化ヨリ、千八百十五年我文化迄
ノ實例ヲ見ルニ、悉ク共ニ猛烈ノ戰鬥ナリ、
步兵戰、兩軍敵ト我ト互ニ橫隊ヲ用ル者ハ、唯他兵ヲ副
加編入スル時ニ、行フノ法トス、而通ソ他兵ヲ以テ、其
戰鬥ノ期會ヲ制スルノ後、步兵戰ヲ挑ムヲ法トス、○
此時攻撃法ノ利害ハ、學科ノ定法ヲ以テ、之ヲ算定シ、
既ニ上章ニ出シ、甲乙攻守ノ二隊而其条中、既ニ其概
略ヲ盡セリ、然レ其點發法ヲ峻疾ニシ、其照法ヲ切實
ニシ、以テ一二着ノ利ヲ取ル者ハ、暫時ノ間ト雖モ、如

此ノ戦ニハ、勝ヲ得ヘシトス、○又靜止ノ、敵ヲ俟ツ者
 ハ、上ニモ示スカ如ク、常ニ利多シト雖モ、然レ此間ニ
 點發ノ時刻ト、點發ノ法ニ注意スルヲ要トス、是故ニ
 敵ノ近ク進ミ來ル間ハ、勉テ散隊ノ火力ヲ盛ニシ、以
 テ此ヲ防キ、而敵十分ニ功ヲナスヘキ射度ノ處ニ到
 リ、其距度百歩ヨリ、百五十歩ノ間ニシテ、銃丸三四分ノ
 一ハ、射中スヘキ處ナレハ、是ニ於テ、初テ速ニ、其陣面
 ヲ展開シ、此時急ニ齊發法ヲ行ヒ、連發スルヲ、兩次ナ
 ルヘシ、此間ニ拔臺龍ノ散隊ハ、急ニ聚合シ、以テ遊軍
 トナリ、少シク此ヲ距リテ、其隊ヲ備ルナリ、而敵尚進

ミ來ルヲ、百歩ナレハ、此間ニ大略一分時ヲ費耗ス、故
 ニ拔臺龍ノ全兵、又此間ニ裝藥スヘシ、而靜止ノ、敵ヲ
 俟ツノ時ハ、第一ノ陣制ヲ以テ、之ヲ迎へ、而又自ラ進
 ニテ、敵ヲ攻ントスルモ、則チ第二ノ陣制ヲ用ユヘ
 シ

第一 步兵拔臺龍俟敵陣圖

步兵拔臺龍
 展開シテ急
 二横隊トナ
 ルノ形

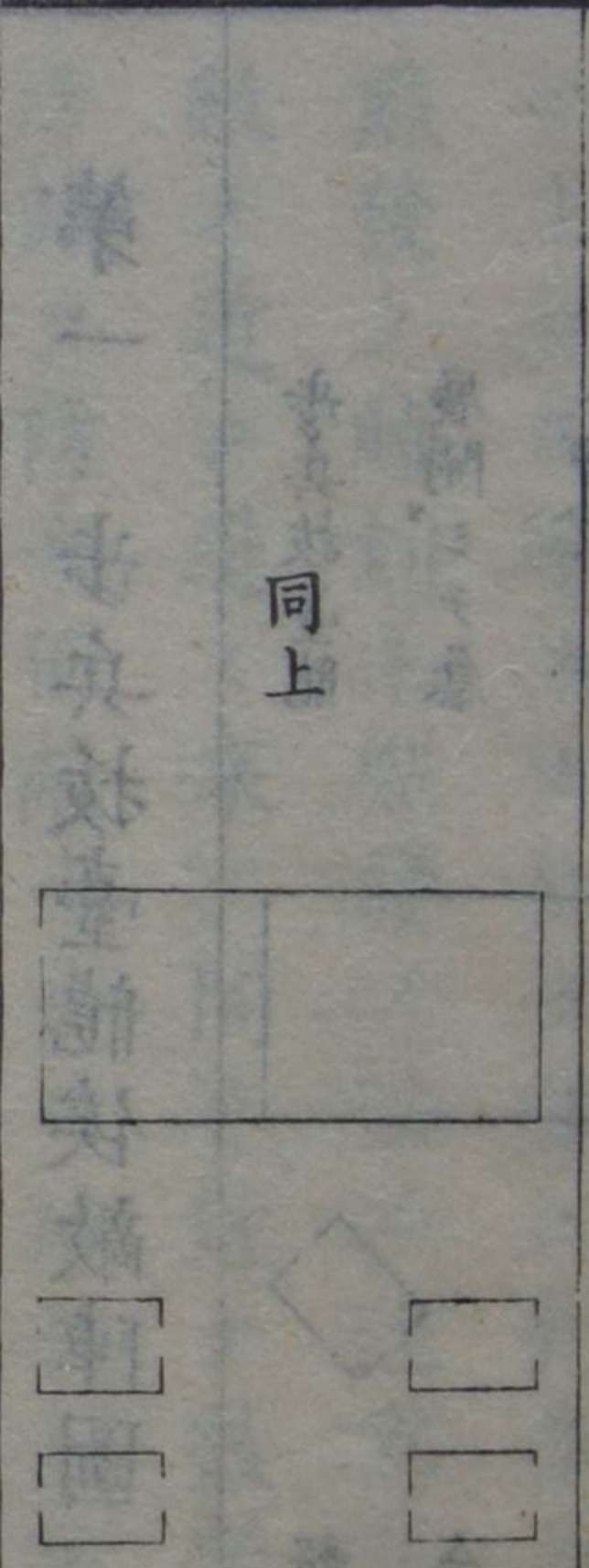


散隊急ニ聚
 合ノ遊軍ト
 ナリ左右皆
 後ニ備ノ形

步兵拔臺
 龍攻守ニ
 用陣圖

兵部 知 卷九

第二 步兵拔臺龍攻敵陣圖



同上陣法
挑戰定法

此時ニ、縱隊トナスルハ、實ニ上ニ比スレハ、尚相應當
 スルカ如シ、然レ全拔臺龍ノ諸運動ヲ促スハ、敵ノ近
 傍ニ在テハ、常ニ之ヲ禁スルヲ要ス、而人ノ恐怖ノ情
 此ノ如キ時ニハ、好ニテ危ヲ避ケ、安キニ遷シト欲ス、
 勇悍ノ兵卒ト雖モ、此ノ如キ時ニハ、往々命令ニ違フ

トアリ、故ニ此ノ如キ、横隊ヲ制メ、安キヲ好ニテ遷ル
 ト能ハス、危キヲ知テ避ルト能ハサラシメ、其情意ノ
 欲スル所ニ、從ハシメサルヲ良トス、而其間ニ銃鎗ヲ
 以テ進撃シ、利ヲ得ヘキノ形勢ヲ見ハ、直チニ遲疑セ
 ス、進撃スヘシ、但シ、其始ハ其歩調ヲ急ニシ、爾後直
 チニ大疾歩ニ遷リ、大喊ヲ發シ、而敵ニ衝入スルノ時
 ニ至テハ、始テ其隊列ヲ堅實ニシ、其形ヲ隆圓ニスル
 ナリ、而敵兵敗走スルカハ、遊軍兩側ヲ繞リテ進出シ、
 烈シク此ヲ追撃セシメ、此間ニ拔臺龍ノ多少差錯ス
 ル所ノ隊列ヲ調整シ、其前行スル遊軍散隊ニ從テ、敵

三 兵部 知 卷九

ヲ追撃スルナリ、但シ、敵兵固ク之ヲ捍拒スルキハ、銃
鎗ヲ以テ、衝入スルノ時ニ、一齊ニ齊發法ヲ行ヒ、而シテ
遊軍其兩端ヲ繞リテ、敵ノ側面ヲ撃ツヲ要トス、○然
ルニ攻撃ノ利ヲ失フキハ、遊軍散隊トナリテ、此間ニ既
ニ其隊ヲ調理スル時刻ヲ得テ、之ヲ整頓シ、直チニ敵
ニ當リ、以テ敵ヲシテ暫ク其追撃ヲ遲怠セシメ、此ニ由
テ全拔臺龍ヲメ、再ヒ散離ノ兵ヲ聚合スルヲ得セ
シムヘシ、ハ、
學科ノ考究スル所ニ於テハ、議論尚多シト雖モ、此法
ハ能ク實用法ト、相符合スル所ハ、巨魁タル故ニ、擯斥

放銃法擇
時期一例

スヘカラサルノ法トス、然ルニ此法ト雖モ、亦其他時ノ
如ク、拔臺龍進行スルノ形ト、主將ノ主意ニ應ノ、更ニ
變化セサルヲ得ス、
千八百三十一年、我天保 第二月二十五日、越魯格烏 地名
ノ戰鬪ノ時、魯西亞國ノ一二拔臺龍ノ兵、懸崖ノ處ヨ
リ漸ク波魯泥亞ノ兵ヲ驅リ、之ヲ窘迫メ、以テ有名ノ
越爾旋樹小林ノ高所ニ至リ、谷ヲ前面ニ隔テ、兵ヲ
屯ス、此時波魯泥亞ノ散隊、谷中ヨリ出テ、魯西亞ノ兵
ト戰ヒ、勝利ヲ得タリ、今其概略ヲ示スニ、波魯泥亞、第
一列細綿多ノ耶傑兒隊 斯千別幾ノ二拔臺龍二橫隊

トナシ一齊ニ進ニテ、其樹木ニ接近スル、魯西亞ノ二
拔臺龍ヲ攻ム、此時魯西亞ノ兵、其間ニ於テ、齊發法ヲ
行フ、二次トス、但シ、其後ノ放銃法大ニ其期ヲ失ヒ、
將ニ第三ノ齊發法ヲ行ント、人装藥スル時、波魯泥亞
ノ兵、既ニ陣中ニ衝入ス、此ニ因テ、魯西亞ノ二拔臺龍
忽チ潰破ノ全ク消滅ス、是レ他ナシ、波魯泥亞ノ兵、此
時マテハ、未タ一發セズ、而衝入ノ時ニ至テ、始テ齊發
法ヲ行ヒ、而直チニ銃鎗ヲ以テ進撃スル故ナリ、按ス
ルニ、魯西亞ノ二拔臺龍ノ指揮官、其點發ノ時ヲ擇ミ、
其的當ノ時期ヲ用ユル、凡ハ、全ク此ノ如キ敗衄ニハ

至ラザルベシ、
凡ノ戰鬥ノ間ニハ、總テ拔臺龍指揮官ノ職務ハ、最大
緊要ナル者ナリ、之ヲ喻ルニ、此官ト其如比丹官ハ、第
宅ノ柱石ノ如シ、柱石弱キ寸ハ、其第宅必ス傾倒シ、二
官其職務ニ應セザレハ、全隊必ス潰破ス、那剎列翁_{名帝}
ノ時ニハ、拂朗察軍ニハ、世人既ニ知ル如ク、拔臺龍ノ
指揮官ヲ撰定スルニハ、久シク火中ニ在テ漸次ニ鍛
鍊シ、鋼鐵トナルカ如キ、純粹ノ職事官、人ヲ専用ス、
_戰百
當リ身數創那剎列翁_{上ニ}此ニ名クルニ、一名号ヲ
受ルヲ云フ、和蘭ニテ譯スレハ、齒牙ニ毛髮ヲ亡ス
以テス、其言ヲ和蘭ニテ譯スレハ、齒牙ニ毛髮ヲ亡ス

三ノ卷ノ下ノ口ノ巻

第二陣編
束定則

ル者ノ義ニ當ル、按ニ屢戰場ヲ經テ、竟ニ形、諸國共ニ
軍中ニハ、此ノ如キモノ、數、頗ル多シトス、權用スベ
シ、然レ、凡列細綿多隊精勵ノ指揮官ハ、勉メテ戰闘ノ
士氣ヲ抑制シ、勇カヲ大發シ、用ユヘキノ期會ハ、精密
ニ之ヲ測リテ、之ヲ指揮スルヲ要トス、
第三陣ノ定法ヲ立ントスルハ、肝要トセサルガ如シ
ト雖、凡之ヲ制スルニハ、歩兵戰及ヒ其他ノ諸戰ヲ論
ヤハ、總テ左ノ者ヲ以テ、其定則トスヘシ、
其一ハ、第一陣蓋シ敗ル、寸ハ、此ニ代テ戰ヲ促シ、
又ハ、其時務之ヲ要スル寸ハ、自ラ其隊ヲ區分シ、其陣

忠兵第二
陣主職

列ヲ變化セシムルヲ主トス、
其二ハ、第一陣戰闘中、其要スル所ニ從テ、此ヨリ其
諸兵ヲ副加メ、以テ之ヲ保護シ、又ハ其闕欠ヲ補足
スルヲ主トス、
其三ハ、側面背後、毫モ危險ナル所ハ、之ヲ救援ノ、保
護スルヲ主トス、是ナリ、
第二陣ハ、須ク縱隊トナスヘキノ理、上章既ニ之ヲ示
ス、但シ、其制遠所ヨリ見ル、能ハサラシメ、此ニ於テ
進出スレハ、神速ノ急功ヲ得可ク、而殊ニ諸變化ニ應
メ、之ヲ防禦スルニ、便ナラシムルハ、固ヨリ論ナク、其

三兵略古知幾 卷九

諸兵ハ、極メテ神速ノ運動ヲ能スルヲ要トス、是レ此形勢ニ於テハ、殊ニ唯之ヲ希望スル所ナリ、是故第二陣ハ、耳目ヲ四方ニ注キ、其時期ニ從テ、預メ其準備ヲナシ、之ヲ要スルノ處ニハ、普ク之ヲ進ムハシ、是レ第二陣ノ主職ナリ、遊軍ノ制モ亦此ニ同シ、其主職ハ、第二陣ヲ保護スルナリ、其狀ヲ第二陣ノ第一陣ヲ保護スルト同シ、故其陣形隊制等、悉ク第二陣ノ條ニ出ス法ニ準スヘシ、但シ、遊軍ハ、第一陣ニ比スレハ、始メヨリ暴發ノ諸害ニ觸ル、一少ナク、是ヲ以テ、之ヲ用ルニ緩々ト考求

步兵遊軍陣法

同上用法

スルヲ得テ、其間ニ發スル所ノ諸變化ノ度ニ準シ、徐カニ其部署ヲ定ムルニ宜シ、是故ニ其原陣ノ制ヲ主トセス、唯專ラ其後ニ用ユル所ノ時期能ク其度ニ中ルヲ主トス、○遊軍、既ニ火隊中按敵ノ火ニ衝入スレハ、其本來ノ總定職ニ從テ、諸事十分ニ行フナリ、而時運安危ノ處ニ、遲疑スルヲナク、其諸兵ノ勇力情意ト、各種ノ頭目小指揮使ナリノ練熟スル所ニ委託シテ、戰ヲ挑ムヲ主トス、故ニ遊軍ハ、其用ル時期ヲ定ムルヲ肝要トス、兵家往々之ヲ主張シ、此ヲ戰鬪ノ終末ニ用シト欲ス、但シ、允當ノ法ニ非ス、總テ戰鬪ノ初起、正中、終

三兵略古知幾 卷九

末ヲ論セス、此ヲ用ユルノ好機會ヲ見ルハ、是レ其
時期ナリ、然レ小歩兵戰ニ於テハ、敵ノ兵力既ニ欠損
シ、又ハ漸ク消込スルヲ見ルハ、始テ上命ヲ俟テ、之ヲ
用ユルニシ、通常之ヲ用ルニハ、敵ノ攻撃スル所ノ一方
ヲ撃テ、之ヲ破リ、其運動ヲ以テ、敵ノ不意ニ出テシテ、
又ハ敵ノ勇氣ヲ挫クノ時ニ在リ、但シ、其的當ノ時期
ヲ測リ、其進出スル處、甚タ遅カラズ、又甚タ疾カラズ、
變ニ乘メ、利ヲ取ルハ、總テ大戦闘ノ如ク、幾多練磨ノ
功ヲ要ス、如此ノ方法ハ、之ヲ喻ルニ、戰ノ形勢ヲ試ム
ルノ試金石ノ如シ、但シ、是ヲ用ルニ、甚タ稀レニシ、世

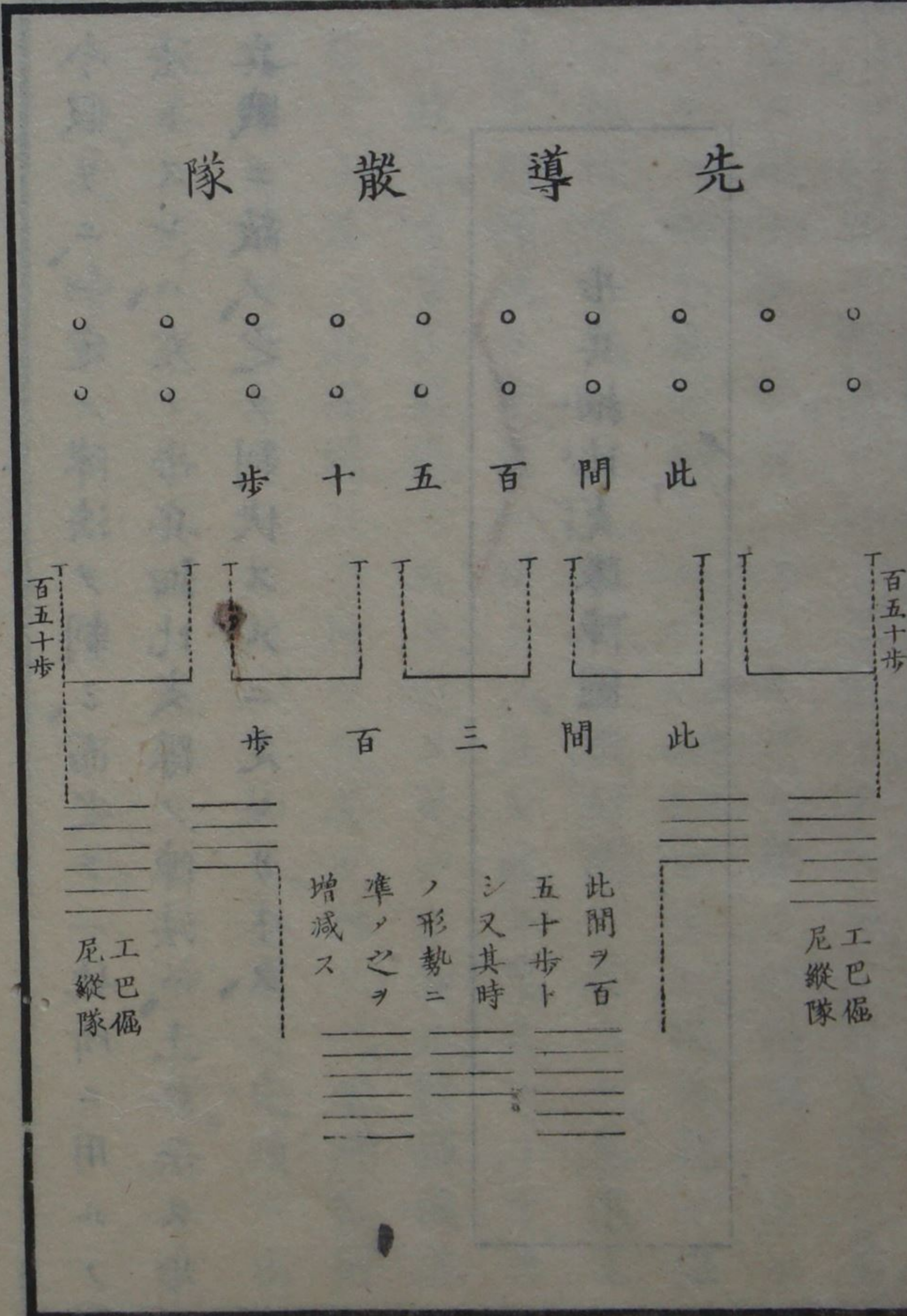
ノ思フカ如クナラサルノミ、而此時ニ要スル所ノ勇
斷ヲ行ヒ、兩軍已ニ亂鬪シテ雜沓狼藉ノ間ニ於テ、分明
ニ正視シ、總テ静止ノ、其時ヲ俟テ、毫毛急躁スルニ無
ク、而其發スルノ狀ハ、狂風ノ起ルカ如クニシ、其目前
ノ諸物品ヲ掃去シ、之ヲ粉塵ニセシムルハ、戰鬥中ハ
總兵ノ任ニシテ、遊軍ハ、之ヲ以テ、其諸戰ヲ全フシ、大功
ヲ謀ルノ道ヲ開ク、器械ノ如シ、三十七年間ノ爭亂ニ
ハ、之ヲ用ルノ總兵甚タ多シ、爾後、兵士互ニ散隊ノ獨
鬪ヲナス、故ニ主將ノ心ヲ茲ニ用ユル所、未タ此時ノ
如ク大ナルヲ見ス、然ニ新近ノ諸總兵ハ、之ヲ廢棄シ

以テ別種ノ戰法ヲ行フ、何如トナレハ、今世全軍ノ數、
甚タ衆多トナリ、其戰法全ク之ニ異ナル編制ヲナセ
ハナリ、而今世ノ初メ十八百年ノマデハ、往々此ヲ唯
小孤行隊ニ見ルノミ、但シ、林戰村鬪ニ於テハ、其進軍
法、上指揮使ヨリ、出ル所ニメ、往々之ヲ要スルヲアリ
ト雖モ、古昔正野戰ニ於テ、之ヲ見ルカ如ク、指揮使其
屬下ト共ニ、此獨鬪法ヲ行フ、其タ稀ニメ、當時歇爾
獨瑪爾斯加爾古官斯勿林人名ノ如キ、全軍ノ先頭ニ出
テ、其目前ニ在テ、潔然トシテ戰死スルカ如キ者、甚タ心
ナシ、是レ時世ノ變化ニ屬スルナリ、

今假リニ、一定ノ陣法ヲ制シ、而之ヲ一地所ニ用ルノ
法トスレハ、左ノ步兵細比支隊ノ陣法ハ、上ニ示ス步
兵戰ニ敵ノ之ヲ制伏スルニ足レリトス、

步兵細比支隊陣圖

尋常步兵
戰細比支
陣圖



兵部
知
卷九

同上之解

但シ、諸兵此ニ布列スルノ形ハ、漸次ニ唯拔臺龍線隊
ヲ占領スルヲ要シ、而第一陣モ、第二陣三陣ノ如ク
云共ニ縱隊初起ノ陣トスルハ、固ヨリ論ナク、而點發ヲ
要スル時ノミ、常ニ展開ノ、横隊トスベシ、是レ宜ク注
意スヘキ者トス。○又第二陣ノ兩翼、及ヒ遊軍ヲ工巴
屈尼縱隊トスル者ハ、時ニ從テ、此工巴屈尼ヲ出シ、又
ハ拔臺龍中ノ一部トナシ、又ハ直チニ、其全拔臺龍ヲ
出シ、共ニ獨立孤行ノ者トナシ、用ントスル故ナリ、又
第二陣ノ中央ノ空地ハ、第一陣既ニ破ル、兵ハ、自在
ニ兵ヲ退ケ、而第二陣ヲ倒破切斷スル患ナカラシム

三兵部古中幾
卷九

ルカ爲ナリ、又兼テ戰鬪ノ初メ之ニ由テ、第一陣ニ一
拔臺龍ノ兵ヲ増加スルノ益アラシム、○又其空處ハ
戰鬪ノ間ハ、遊兵ヲ以テ、之ヲ充實シ、而第三陣ノ左右
工巴徇尼縱隊ヲナス拔臺龍ハ、其拔臺線^{出上}ノ外端
ヲ距ルノ度、左右悉ク相齊フシ、而其隊ヲ援救スルニ
ハ、僅ニ一二分時ニメ、至ルヲ得セシム、若シ夫レ形
勢ニ準メ、遊軍ヲ第一陣ノ左右兩翼ノ拔臺龍ノ前ニ
備ルヲ要スルハ、尚其殘留メ不虞ニ備ルノ兵ハ、
一細比支ノ十一分ノ五ニ居ルナリ、故ニ其兵數十分
ニ多ク人之ヲ以テ、戰鬪ノ間ニ、利アル諸變化ヲ生シ、

或ハ否ラサルモ、其兵數ヲ以テ、良功ヲ得ルニ足レリ、
但シ、此諸隊ニモ、亦既ニ上ニ示スカ如ク、其原陣ノ制、
後來諸形勢ニ準メ、自在ニ變化スルニ、便ナルヲ主ト
ス、此便利ヲ得サルハ、常ニ闕欠ノ陣法ニメ、之ニ由
テ、或ハ良功ヲ得ルヲアルモ、亦唯偶然ノ僥倖トスヘ
シ、
一陣法ヲ以テ、防戰諸般ノ變化ニ、應當スル者ヲ制セ
ントスルハ、固ヨリ難ク、又爲スル能ハサルカ如シ、各
種ノ歩兵戰、諸主要ニ準當スル、攻撃陣法ヲ制セント
スルモ、亦甚タ難シトス、此ハ土地ノ障得、其他ノ事情

三 兵名 知幾

老加

二 係テ此ヲ齟齬セシメ而一陣法ハ唯兩軍其利ヲ一
 二ニ其形勢ヲ齊フスル時 兵數同シクノ平地上ノミ
 準當スルハ固ヨリ論セス人自ラ瞭然タ以テ
 一 朝起リ以テ討難ニ入リて是ハ其常ニ人
 六 凡ハ身ハ動カズ而シテ其心ハ動カズ是ハ其
 也此野陣也其法ハ其常ニ陣又ハ朝起リ
 對來無討難ニ事也自今ニ變計スルニ則チ其
 野ハ此其常ニ事也其法ハ其常ニ陣又ハ朝起リ
 五 兵答古知幾卷之九終

